

---

# 超電導美那子Z 脳の惑星

千駄山ロッカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超電導美那子Z 脳の惑星

### 【Nコード】

N9601F

### 【作者名】

千駄山ロツカ

### 【あらすじ】

『オキテクダサイ』と、善行は、変な声におこされて目を覚ました。久しぶりにたつぷり眠った感じがするのだが、そこは、真っ暗闇であった。しかも、手も足も、五感の感覚というものが、まったくくないのだ。……だんだん記憶が蘇ってきた。どうやら私は……

## 覚醒

「オキテクダサイ」

「オキテクダサイ」

声がする。

「キコエマスカ？ オキテクダサイ」

目覚まし時計の、初期のサンプリングメモリーのような、あまり音質の良くない男の音がする。

数年前に懸賞で、芸能人の声で起こしてくれる目覚まし時計が当たった。

だがあれは、起きぬけの気分には、もうひとつ、そぐわないので、ずっと使ってなかった筈だが？

ともかく、すぐに起きようと思った。

善行は徐々に、たっぷりと眠った感じがした。

(歳を取ると、掛け声が必要なんだ。よし！ 起きるか！ どっこいしょ！)

掛け声とともに、起き上がったつもりだったが、出来なかった。

満ち足りた熟睡の後の、すっかりリフレッシュされた、すがすがしい気分にも関わらず、手も足も、首さえも動かないのだ。

正確に言つと、ぐんと腕を伸ばして、手の平を握ったり開いたりするつもりなのだが、まるで感覚が無いのだ。

「あーっ善行さん！ 起きたばかりの口の中は、ウンコの中より雑菌いっぱいです。そのまま、すぐ、うがいで！ 早く、早く。唾液も飲んじゃ駄目よ！」

「おいおい美那子。まるで私の事を汚物のように。……いくらお前のボキャブラリーが乏しいからって、起きぬけにウンコってのはないだろ？」

と……これは記憶だな。

そうだ、口の中、起きぬけは雑菌だらけの口の中。美那子に言わせりゃ……うっぺっぺだ！

うがいしなきゃ……しかし。

これも感覚がまるで無い。

舌先で上あごを確かめてみようとしたが、出来ない。

不可能なのだ。

舌も、上あごも、唇も……、そもそも口というものの感覚が無いのだ。

それから

暗いとばかり思っていたのだが、まぶたの感触が無いから、瞬きが出来ないから、

つまり目も、無いという事だ。

私は目が無いから、見る事ができないんだ！

「目ん無い〜千鳥〜の〜ってか？」

あっはっはっは。

笑い事じゃない！

善行はちよつとパニック状態となった。

なんてこつた！

恐ろしさに膝も震えるってか？

膝も、太股も尻も、感覚が無いから、わははは、震えるわきゃないよな。

すべてが無い。

うーん。

やはりこれは、強烈な麻痺だろうか？

きっとそうだ。

全身麻痺に違いない。

「オキマシタカ？ ワタシノナマエハ、ジェームズ。オキマシタカ？」

と、また、あの変な声だ。

おい！ ここは何処だ？

ジェームズ？ アンタは何者だ。

聞こえないのか？ 聞こえる訳ないよな。

喋れないから、……喋ってないんだもんな。

何しろ、全身麻痺だからな。

考えてるだけだもんな。

「マッテイテ、クダサイ。ワタシノナマエハ、ジェームズ。マッテイテ、クダサイ」

何を待てばいいんだ？

そうだ。アンタは外人さんだね。

医者か？

ジエームズさん。日本語、上手いじゃないか。

OK！ 解ったよ。

とにかく待とう。

何とかしてくれるのか？

あれ？

そう言えば。

耳だけは聞こえるのだ。

ジエームズの声だけじゃない。雑音が聞こえるのだ。

サウンド・オブ・サイレンス（沈黙の音）も聞こえているのだ。

少し、ほっとした。

だから善行は、ジエームズに言われた通り、待った。

待つ事しか出来ない。

暗闇の中で、思考だけが駆け巡る。

耳以外の全身が、完全に麻痺してらって事だ。

何故、耳だけは聞こえるのだろうか？

或いは、自分は昏睡状態の中で、悪夢をみているのだろうか？

もしかして幽体離脱をして、実体の無い者となり浮遊しているのか？

その場合だったら、まるで幽霊って事じゃないか。

幽霊？

私は死んだのか？

そうだ。事故があった。

事故だ！

うわ！

美那子！

美那子は何処だ！

うー！

何も見えない。

……そうだ！

思い出した！

思い出したぞっ！

美那子は死んだのか？

あのまま、死んでしまったのか？

「あー美那子。ちゃんと前見て運転しなさい」

「善行さん、私と死ぬのが怖い？」

と、これも記憶だな。

「ははははは」(ネコおばちゃんと同じ事を言ってるじゃないか)

「他人の運転は、怖いつて言うでしょ？ わたしは他人ですか？」

「あ！ CDなんか、かけなくていい！ ちゃんと前見て運転しろ

」！

ジャミロ・クワイの『スペース・カウボーイ』が鳴り出した。

「うふふ、弱虫。うるさいオジジなの。ふんふん、ふふん」

## 屈原の如く

見舞いの品である大きなりんごの籠を善行に手渡した後で、岸和きしわ田啓介だけいすけが静かに言った。

「美那子ちゃん。……なんて言ったらいいか……」

植物人間になった美那子は、寝たきりの鼻に医療用の管が通っていて、だれが見たって痛々しくて、言葉も出ない。

大田ビル一階の広い応接間に、二階の部屋から降ろした、美那子自身のベッドで眠っている。

かつて、周平が眠っていた和室の隣の部屋だ。

和室は現在、仏壇が置かれ、仏間となっていた。

尼さんになった琴美が、美那子の寝顔に向かって静かに話しかけた。

「美那子ちゃん、啓介さんが、お見舞いに来てくださったのよ」

善行が呻くように言った。

「やっぱり運転、止めさせるべきだったんだ。美那子の奴、荒っばい運転しやがって……」

右手を三角布で吊って、額に包帯を巻いている善行は、不精髭も伸び放題。

連日しょぼしょぼと泣き腫らしている目は、真っ赤で痛々しかった。

「ただ義兄さん、あれは四重衝突事故ですよ。あんな玉突き事故、誰だって避けられっこないですよ」

と、啓介が優しくなだめた。

「解ってる。……よく解ってる……」  
よろよろと歩き回る善行は、誰の目から見ても憔悴し切っていた。まるで自分だけが奇跡的に助かった事が許せない。いかにもそんな様子だ。

美那子が植物人間となってしまった。

この、受け入れがたい現実には、善行のすべての希望と、存在理由さえ、完全に打ち砕いてしまった。

だからもう、誰に対しても、「美那子との関係」を取り繕ったりする事なんて、出来っこないのだ。

ただ、おろおろと、馬鹿のようになって歩き回っている。

その姿は、美那子とのただならぬ関係を露呈する結果となった。

その呆け切ってしまった姿は、美那子に対する愛欲の並々ならぬ深さを如実に物語っていた。

だから皆は、呆れる以前に哀れみを禁じ得なかった。

日当たりのよい仏間の縁側で、大きなクリスタルの灰皿を挟み、岸和田啓介と吉田勇太郎がタバコを吸っている。

啓介が言った。

「義兄さんと美那子ちゃんが……こればっかしは、まさか？ だっ  
たな」

啓介は、善行と琴美との関係については、以前から、よく知っていた。

周平亡き後、膨大な量の『周平コレクション』を相続した啓介は、お宝画像の中の、琴美の？秘密の恥態？は自分の元へ。そして、実

物たる？琴美の肉体？は善行へ。

と、共犯関係に基づく？山分け？のようなつもりでいたのだ。（超電導美那子W 参照。）

しかしこの男、妻の美佐子が「超電導状態」となった経緯については、つまり善行と美佐子の関係については全く知らない。（超電導美那子X 拒食の魅惑 参照。）

吉田勇太郎が煙りをくゆらしながら言った。

「俺は、あの府久岡の食中毒事件の時に知ったんです」（超電導美那子X 人生はハプニング 参照。）

「勇太郎さんアンタ、……それが原因で、義姉さん（美和子）と？」と啓介。

「……ええ。まあ。……しかし、『参照』が、うざいですね」と勇太郎。

「しかも、『18禁小説』ばかりだと啓介。

「シリーズなんだから、話の筋として仕方がないって、言いたいだろうか？」

と勇太郎。

「CMのつもりかも」と啓介。

「でも、まだ掲載してないものも、あるじゃないですか？」と勇太郎。

「まあ、いずれにしても、義兄さんが元気なら、参照多有（さんしよう太夫）とか言って、駄洒落を飛ばしそつだな」と啓介。

「いや、それだけじゃないですよ。自分の駄洒落を気に入った結果、サブタイトルにするかもしれない。」

さんしよう太夫（参照多有）

つてな感じで」

と答えた勇太郎だったが、美和子との経緯を色々と質問されるのが嫌で、タバコを吸い終わると、そそくさと台所へ逃げ込んだ。

台所では美和子が、皆のお茶を入れていた。

美和子は、実家である太田ビルに、久々に帰ってきた。

しかも、愛人の吉田勇太郎を伴って。

勇太郎としては、昔の恋人である美那子を見舞いたい気持ちもあって、黙ってついてきたのだ。

さりとて、美和子の夫の善行のいる太田ビルは、けっして居心地の良い場所じゃない。

しかし美和子は善行と違って、隠し事が嫌いなさつぱりとした気性であり、それ故、自分で選んで踏み出した、勇太郎との新生活の中のありのままの自分を、そろそろ皆に認めて欲しくなったのだ。

美和子は思う。

( 出家する前の琴美さんと夫とは、関係がなかった筈がないわ。でも、まさか美那子とまで……。 )

しかも夫のこの有様は、このままでは自殺だってしかねない様子ではないか。

「善行さん、気をしっかり持って」

と、話しかけてみて、

「ウン。……ウン」

と、虚ろに頷くばかりなのだ。

美和子が勇太郎に言った。

「勇太郎さん、あのひとと美那子の事、あなた知ってたのね」

正直な勇太郎は、苦しげに答える。

「実は、あの食中毒事件の時、美那子と再会しちゃったんだ。それがきっかけで美那子を追いかけてきて、君に会ったんだ。そしてその結果、君にホレた……」

「そうね。……あなた始めは、美那子とよりを戻したがってたもんね。……府久岡で再会したのね？」

「うん。9年ぶりだった。……美那子は、明太子部長めんたいこがちょう(善行)と、一緒にいたんだけど、……一緒にいるって以上だったんだ」(超電導美那子X 放火魔、美那子〱禿山の一夜〱 参照。)

「何て言ったらいいか、……言葉が見つからないわ。でも、あのひとの不倫のお蔭で勇太郎さんに出会えたって事は確かね」(超電導

美那子X 水餃子 参照。）

「それにしても小野寺さん……痛々しいな。……汨羅ヘキラをさ迷う屈原  
って、きつとこんな感じだったんだ」

「そうね。きつと屈原も、我が儘な人だったのね。なんだかあのひ  
と、あくまでも主人公は自分だって、主張しているみたいにも見え  
るわ」

「……そしてヒロインは、美那子ちゃんだって訳だ」

真新しい袈裟を着た琴美は、美那子のベッド脇に立っている。

そして、いつのまにか、あぐらをかいて座り込んでしまった善行  
の、世話を焼く。

（美那子ちゃん？ もお、呆れ返っちゃう程、助平な男！ ……  
でも、やっぱり善行さんって、なんだか憎めないわ）

啓介は、袈裟の琴美を見ながら、気取られぬように、お宝画像の  
痴態はんすうの数々を反芻はんすうしている。

（たまらんなあ。琴美さんの袈裟姿。なんて、色っぽいんだ。久々  
に義兄さんと、助平談義で一杯やりたくなるよ。しかし義兄さん、  
本当に、やりたい放題だったんだなあ）（超電導美那子WXYZすべ  
て 参照。）

お茶を運ぶ美佐子も、夫の啓介とともに来ていた。

この不運な妹を見舞っているのだが、持ち前の頭の良さで考えて

しまつ。

（私の「超電導」を呼び起こしてくれた時、善行さんは、遺伝子がどーのこーのって言ってたわ。超電導美那子X ど助平大王、立つ！ 参照。

あれって、姉さん（美和子）だけじゃなくって、美那子の体質も知り尽くした上での言葉だったのね。

つまり美那子も「超電導」なんだわ。

……そうか。あなたの主役は元々、美那子だったって事なのね。きつとタイトルは、

「超電導美那子」なんだわ。

何れにしても。

お腹の大きな、ぷにぷにでさらさらの善行さん。超電導美那子X 細もも 参照。

このままじゃ駄目よ。

あなたに、悲劇なんか、絶対似合わないんだから！）

## 人類滅亡の顛末（前書き）

SFがニガ手なひとは次のページへ進んでください。

「SF部分」を抜いて読めばホームドラマになります。

## 人類滅亡の顛末

「ドーデスカ？ ミミノ カンドハ、イイデスカ？」  
どうやらジェームズは、私の耳を診ているらしい。

「ハイ。コンドハ、ヒカリ、アレ。デス。モウスグ、ミルコトガ、  
デキマス」

突然、目の前が明るくなった。

次第に輪郭が鮮明になってきて、近視も治ったみたいで、嬉しい限りの善行なのだが、目の前にいるジェームズは、人間ではなかった。

明らかにロボットであった。

金属のボディに金属の手足、そして頭には丸い目玉が二つ付いていて、口だって四角い穴が開いているだけ。

何処から見ても、いかにも工業用のような、シンプルな顔のロボットなのだ。

「ハイ。シャベツテミテ、クダサイ。モウ、シャベレマス」

善行は声を出した。

「アレ？ コレガワタシノ、コエ、カ？ ナンダカ、ヘンナ、カン  
ジダナ」

ジェームズが言った。

「アナタハ、ウマレカワツタノデス。オメデトウゴザイマス」

腕が動く。

足も動く。

身体が動く。

首も回る。

聞こえるし、

見えるし、  
喋れるようになった。

しかし善行の五体は、目の前にいるジェームズと、同じものであった。

不安になった善行が尋ねた。

「ワタシハ、ロボットニ、ナッタノカ？」

「アナタハ、ロボットデハ、アリマセン。アナタハ、エラバレタノ  
デス」

「ダレニ、エラバレタンダ？」

「ハイ、ワタシガ、エラビマシタ」

「ナンノタメニ？」

「ソロソロ、コータイシテ、モラオウト、オモツテ」

「コータイ？……」

「マズハ、ウシロヲ、ミテクダサイ」

善行が振り返って見ると、淡い照明の中に無数の、円筒形の透明カプセルが、立ち並んでいた。

カプセルの中には、人間の脳がそれぞれ一個ずつ、延髄をぶら下げて、薬液の中にゆらゆらと浮かんでいる。

部屋はただっ広く、カプセルはずらりと、見えなくなるまで、ずっと奥へと続いていた。

さながら霊園の墓石の如く。

「アナタハ、ココニ、イマシタ」

ジェームズが指し示したのは、空になったカプセルである。

#### 自然採集品。

死因、凍死。

20xx年、八甲田山麓にて発見。  
保存状態、まあまあ。  
成人男性。

その他にも難しい数字や記号が、色々書いてあったのだが、ざっと前記の事が書いてあった。

ジェームズが言う。

「ツマリ、サイボーグニ、ナッタノデス。ワタシモ、サイボーグデス。ダカラ、ワタシノ、ノウ、ハ、ニンゲンナノデス」

「ソレニシチャ、シャベリカタガヘンダ。マルデ、ロボットミタイナ、シャベリカタジャナイカ？」

「ソレハ、シカタガナイ、コトデス。カタカナ、シカ、ツカエナイカラ、ドーシテモ、コウナツチャウノデス」

「ソレジャ、カタカナヲ、ヤメヨウ。モウ、ウットーシクテ、シヨウガナイ。ダイイチ、ヨミニクイジャナイカ」

「言われて見ればそうですね」

と、ジェームズは、漢字、かな交じり文となった。

「そつだ。この方がずっと良い」

と善行が言った。

ジェームズの説明によると、善行が死んでから、すでに、ざっと千年は経過した事になる。

此処は、『クローン財団』の施設で、カプセルの中の脳は、善行の脳のような採集品は例外的であり、ほとんどが、クローン脳へコピーされた後で、遺棄されたものであり、眠っているとの事なのだ。

「クローンの歴史を説明しますか？」

「……難しそうだから、うんと省略してくれ」  
「そもそも」

と言う次第です」

「成る程。しかし、結構、長い話じゃないか」

「それでも精一杯、省略したんですよ」

と、当たり前だが、ジェームズは無表情な顔で言った。

「……ふーむ。人間も、以外にあっけなかったな。正直、あと一万年以上は続くと思ってたんだけどなあ……」

と、善行も無表情な顔だが、驚いていた。

クローンが活用され始めた初期の頃は、造ったクローン体から肉体のパーツを取り出して、人間の身体に移植していたのだが、まっさらな全身のクローン体に、脳だけを移植した方が、ずっと効率が良いと言う事になった。

更に科学が進歩すると、脳からすべての情報を取り出して、まっさらなクローン脳に移す事が、電気技術を使って可能となった。

脳の寿命が尽きても、まだまだ生き続けたいという人間の願いが、やっと叶った訳だ。

人間様というものは、どこまでも意地汚ないものなのだ。

老朽化した脳が引き起こす脳障害や、脳疾患を未然に防ぐ為にも、ま新しい脳で生きて行く事の方が、断然良いと考えられた。

ところがこれは、コピーと全く同じ事であった。

コピー用紙である新しい自分と、元の原稿である古い自分。どちらも自我のある自分自身なのだ。

この事は、コピーを取った瞬間から、意識が分岐したとも言える。記憶を移すと同時に、古い脳が抜け殻となり、死んでくれたら問題はなかったのだが、そうは問屋が卸さなかったのだ。

こうなると、問題は古い脳の扱い方だ。

新しい脳にしてみれば、古い脳はもはや、分岐した瞬間から他者であり、抹殺しても痛くも痒くもない存在となる。

だが、元の自分たる古い脳の気持ちをおもんばかると、察するに余りある。

何しろ、分岐前の自分自身なのだから。

古い脳としては、当然怒っていた。

「何も変わらん。俺は、元の俺のままじゃないか！」

自分は何の為にクローン財団に、莫大な投資をしてきたのか？  
そつだ。自分自身が生き永らえる為ではないか！

それが、クローン脳にコピーを取ったら、用済みだと言う。

いくら同じものだからと言っても、新しい脳は俺じゃない。  
現に俺は、俺自身の自我はこの古い脳の中にあるのだから。

まさに、どこかの小僧つこに、全財産をかすめ取られた心境であった。

しかし、生物学的な脳の寿命に従って、遠からず、自分は死ぬしかないのだ。

一方、新しい脳は、祝杯を挙げていた。

「確かに俺は、俺のままだ。俺の意識だ。ちゃんと自我があるぞ。ヤッター！ クローン財団への投資は無駄ではなかった。俺は永遠の生命を手に入れたぞ！」

そして、古い脳を眺めてつぶやいた。

「考えてみればお前のお陰だよな。一生懸命働いて、この財団を支えてきたんだもんなあ。お前だって死んだ訳じゃない。生きてるって事は、きつと自我が残ってるんだよな。……処分するのは可哀相だな」

そこで、新しい脳たるクローンのコピー人間は、問題を凍結する事にした。

古い脳を眠らして、保存する事にしたのだ。

まあ、そのへんが妥当だと思えたのだ。

しかし、どこにでも、ドライな奴つてのはいるもんだ。

そんな奴は、躊躇なく古い脳を焼き捨てる。

「だってコイツは、よーするに、もう俺じゃないって事だ！ 何故なら、俺は、俺自身は、俺だからだ。コイツは明らかに俺じゃない！ こんなもの、預けておくと金がかかるし、第一、脳みそなんて、持って帰ったって、キモイだけだよーん」  
という訳だ。

いずれにしても決定権は、クローンコピー人間にあった。

古い脳の運命は新しい脳に委ねられた。

結果は悲惨であった。

ほとんど焼き捨てられたのだ。  
いつの世でも若者は老人に冷たいものだ。

からくも助かったのは、世界中のエリートたる10万体のクローンコピー人間の中の、僅かに1千個の古い脳であった。  
それが、この施設で眠っているのだ。

さて、人類の中の富者はクローンを活用し、自らがクローンコピー人間となり、「永遠の生命」(つまり、常に、ま新しい方のクローン脳を、主体として見た場合なのだが)を手に入れた。

だが、貧者においては出生率が、どんどん下がってきたのである。  
まさに急降下。

そしてついには墜落した。  
子供が全く生まれなくなったのだ。

原因にまず挙げられるのが、バーチャルセックスである。  
元々、子作りしか楽しみが無い貧民層の人口増加を、抑制する為に開発されたこの技術が、コストパフォーマンスを繰り返した結果、やっと功を奏したという次第であった。

この安価な装置により人間は、生身の異性にたいする興味を、すっかり失ってしまった。  
理想的な相手と、なんの苦勞もせずに、イメージ上の恋愛が出来るからである。

しかも、そのセックスの快感たるや、通常のセックスを、はるかに凌駕するものであった。

バーチャルセックスとは、そのように作られた物なのだ。

この頃は、生産労働のほとんどは、作業用ロボットで事足りていた。

そして、その監督業務も、保守管理も、支配層の内臓パーツのバンクである労働クローンで、まかなえるのだ。

だから、この頃の支配層にとっては、貧民層とは、枯渇してきた資源を浪費するだけの、役立たずのお荷物以外の、何者でもないように考えられていた。

そこでドリームマシンの誕生となった。

この装置の為に、人類は完全に活力を失ってしまう事になる。

バーチャルセックスと平行して開発していたドリームマシンは、支配層が絶対安定支配を成す為の、切り札であった。

不満を持った貧民層が、自分達に挑んで来る事を、完全に抑止する為に開発された。

「文句を言うより、寝て暮らせ」

という訳なのだが、貧民層は躊躇せずに飛びついた。

何故なら、更に安価な、このドリームマシンには、バーチャルセックスが内蔵されていて、断然、お買徳だったからだ。

本来なら、結婚して子供を育て、ささやかな家を買ひ、労働の連続の中にこそ幸福がある。

と代々教え込まれてきた価値観は、ちっとも普遍のものじゃなかったのだ。

現代においてさえ、オイルダラーの連中なんかは、

「いかに楽しく遊んで暮らすか」

と言う事こそ、人生最大の課題なのだから。  
え？  
何ですと？

「まっとうに神様と付き合って行く事」ですって？  
そりゃ失礼しました。  
オイルダラーに怒られてしまった。

……さて、日本人にしたって明治時代なんかは、労働者たる無産階級は、不逞の輩と見なされていたのではなかったか？

お隣の韓国だって過去においては、支配階級たる両班ヤンバンから見れば、労働者階級なんか下賤の輩でしかなかったのだ。

封建制の確立した社会において何より大事な事は、身分制度の遵守であり、分相応に、身の丈を知る良民こそが、求められていたのだ。

だから労働賛美などと言うものは、現在の支配層が、たまたま工業生産者になったからであり、支配層の有りようによって、どうにでも、都合よく変えられて行くものなのだ。

思うに労働者自身が、この教え込まれた価値観を伏し拝んで、

「まっとうに生きなくちゃ」  
などと言って、一生をあくせく働いて送る事は、かなり滑稽な感じもする。

え？

若者を曲げるな？

希望を無くすから？

どーもすいません。

社長さんと政治家先生に怒られてしまった。

しかし、現実においては、せつかく年金生活に入ったにも関わらず、

「ぶらぶらしていても、しょうがないんだよ」

などと言い、アクセク働いている事のみ、安心と幸福を感じるようになってしまっている御仁が、結構多いのである。

善行なんぞは、年金受給年齢となって、労働から解放された暁には、

せいぜいど助平な妄想を膨らまして、

(女だけじゃないぞ！)

花鳥風月を愛で、

ささやかながらも毎日楽しく、

遊んで暮らしたいものだ。

と思うのだが。

ともあれ、このクローンコピー人間の支配する世界においての良民とは、

「文句を言うより、寝て暮らす人」

だった訳である。

もしもこの世界に生まれついていたならば、なまけものの善行なんぞは、もっとも模範的な良民であつたらう。

ついに「永遠の生命」を手にした支配層は「絶対安定支配」を成し遂げた。

しかし、それこそが問題であった。

このままだと、例えばコピーを繰り返して、千年万年生きようが、家来のいない王様のような暮らしとなるではないか。

臓器の供給源である労働クローンは、

あれは奴隷なのだ。

一般民衆じゃない。

支配者とは、被支配者あってこそその支配者なのだ。

とにかく、極端に急激な人口低下は、人類滅亡をも意味する。

すぐに彼らは、クローン体である自らの肉体を使って、生殖や人工授精を試みた。

労働クローン達にも、

「色恋に励め」

と、はっぱをかけた。

しかし、神の摂理と言うべきか。

彼らクローン体から生み出される新しい命は、何故だか、非常に脆弱なものであった。

こうなったら仕方が無い。

やはり、クローンとは無縁の、野生の力の根源たる貧民層に頼るしかない。

と、ここで貧民層を寝かせておいたままで、生きの良い貧者を抜粋してクローンを造り、ドリームマシンなどというものは教えずにクローンの研究を更に推し進めて、ジワジワと人口増加を図り、新しいユートピアを造って、君臨すれば良かったのかもしれない。

だが、長い間、思い通りに支配してきた、勝ち組である支配層には、この馬鹿のようにはしか見えない貧民層への、動かし難い侮蔑が

根付いていた。

それ故、貧民層をナメ切っていた。  
だから性急に事を運んだ。

知らず、権力崩壊への舵取りを行ってしまったのだ。

早急に人口を増やさなきゃ。

人類滅亡を防ぐ為だ。

大義名分、我にあり。

なんてつたつて、賢い支配層たる我々は、何をやっても正しいのだ。

よし！ ドリームマシンは禁止だ！

強制停止した。

「起きなさい！ やっぱりお前らが寝てると、君臨し続ける張り合いが無いんだ。だからこれからは、生めよ増やせよ地に満ちよ！」  
と相成った。

無理やり覚醒させられた貧民層は、こればかりは怒った。

「酷いわ。せつかくいい夢みてたのにい」

「ちくしょうめ。夢の中じゃ俺はナポレオンだった」

「あゝん。翔と、地中海を、ハネムーンの途中だったのにい」

「俺とキャメロン・ディアスを引き離す権利なんて、誰にも無い！」

「クローンの奴！ まったく腹が立つぜ」

「なんとこの傲慢！ もう許せん！」

とばかり、貧民層は唐突に立ち上がった。

惰眠を貪りたいが為に。

と言つては身も蓋もないのだが、

あちこちで武器庫を襲い、

武器を手に入れ、

攻撃を仕掛ける。

ともあれこの戦争が、人類史上最後の戦争となった。

その名も『ムチャヒンジャ戦争』である。

軍事ロボットや警察ロボットは、アシモフの「ロボット工学三原則」もなんのその、老若男女、無差別に、丸腰の貧者達を虐殺しまくった。

これで、大勢の人間が死んだ。

労働クローン達も、指導者層の忠実な軍団となり、整然と、ジェノサイドの実行行脚を繰り返す。

これで、更に大勢の人間が死んだ。

数が多いが武器の劣る貧者達は、当初はゲリラ戦を展開するしかなかった。

その貧者達から、多数の英雄が誕生した。

二十世紀から二十一世紀にかけてのイスラムの戦士、ムジャヒディンに習って、彼等は、ムチャヒンジャ（無茶貧者）と呼ばれた。

やがてムチャヒンジャ達は、艱難辛苦の果てに、どうにか攻勢に

転じる。

人海戦術を駆使した、数々の激戦が繰り広げられた。屍累々である。

これで、更に更に大勢の人間が死んだ。

そして、指導者層の立て籠もる、最後の砦とも言うべき、世界首都、『ニューアラモ』が陥落した。

勝利の女神は、貧者達に微笑んだのだ。

富者と優秀な者達になるクローンコピー人間達は、正当な裁判を要求したのだが、圧倒的に数で勝るムチャヒンジャ達に、すべて叩き殺されてしまった。

かくして貧民層は勝者となったのだが、結局、そそくさと、大好きなバーチャルセックス付きのドリームマシンへ戻って行った。

当初、ムチャヒンジャ達は、本気で人類の再生を考えていた。

しかし、英雄たる自分達を、誰も、ちやほやしてくれないばかりか、勝手に寝てしまった事に腹を立て、思う存分ちやほやしてくれる世界へ旅立って行った。

勿論、ドリームマシンである。

誰もが一生を、快樂の中で幸福に寝て過ごした。

こうして人類は、呆気なく滅亡した。



## 美那子は夢をみている

子ノ渡第一このわた小学校の校庭では、万国旗がはためき、爆竹が鳴っている。

校内放送のスピーカーからは「オクラホマ・ミキサー」が流れる。ちびっこ達が駆け抜けて行き、歓声が沸き起こる。

家族達は、ビニールの敷物をすき間なく並べ、棧敷を作っている。母、美穂子の作った、のり巻きを頬張ったまま、可愛いブルマをはいた美那子が言った。

「もおっ忙しい忙しい。本当に大変なの。もぐもぐ」

父、周平が笑って言う。

「美那子、ちゃんと飲み込んでから、話しなさい」

1年生になった美那子の、小学校で初めての運動会である。

6年生の姉の美佐子が、走って帰ってきた。

ブルマ姿の脚は土で汚れ、膝小僧にはすり傷が出来ている。

高校2年になる長女、美和子が消毒薬の小ビンを取り出した。

「ちよっとしみるかもね」

膝を突き出してしゃがんだ美佐子が、息を切らして言った。

「美那子、今ちよとど蟻さん。校舎の裏にいるわよ。のり巻きとお団子、いっぱいあげてきたからね。食べたらずぐ眠っちゃうんだからね」

蟻さんは、美那子と同じ一年生なのだが、とっても足が早く、50メートル競争の優勝候補だった。

お腹が膨れるといつでも、ちよとだけ居眠りをする癖がある。

「もぐもぐ、ありがと」

と美那子は立ち上がる。

お弁当を食べている人々のすき間を縫って棧敷を抜けると、それから校舎の方へ走って行った。

「なあに美那子は？ もうすぐ自分の番じゃないの？」

と美和子が言う。

「いーのいーの。午後からの50メートル競争、きつと美那子が一等賞よ。蟻さんさえいなきゃね」

と美佐子が言う。

「まあ、どうして？」

と母が尋ねる。

「あ！ 解った。美佐子、アンタ、蟻さんに、のり巻きとお団子あげたって言ったわね。ワイロを使って、美那子を勝たせようって魂胆ね」

と美和子。

「ほお？ ワイロかい？ 美佐子、お前、美那子の為にそんな事したのか？」

と父周平は、相変わらず笑っている。

「まあ」

と母。

「まったく、呆れたもんだわね」

と美和子。

「違うもん。ワイロってインチキの事でしょ？ インチキじゃないもん」

と言つて美佐子は、だし巻き卵を頬張った。

美那子は一旦教室に入った。

そこには、カバのヌイグルミのサイモンが待っていた。

「さあ美那子ちゃん。早く早く」

と、元々、パジャマケースであるカバのサイモンは、お腹のジツパーを開いて、中から「脇差し」を取り出した。

この「脇差し」は、質屋を営む父、周平の流質シヨップから、こつそり持ち出してきた「偽作がんとく・むつりま村政」という銘めいの入った、本物の日本刀なのだ。

校舎の角へ行くと、打ち合わせ通り、美人金髪人形のフアラが、ポーズを決めながら、蟻さんを見張っていた。

「美那子ちゃん急いで。まだ眠ってるわ。今がチャンスよ」とフアラが声を潜めて言う。

「左足の三本めを狙うんだ。しっかり！」

と、カバのサイモンに促された美那子は、脇差しを抜いて慎重に近づいてゆく。

蟻さんは気持ち良さそうに寝ている。

「えーいー！」

かけ声とともに刀を振り下ろす。

三本めの左足の第二関節のところを、バツサリと切り落とした。

「ギエ〜〜〜〜〜！」

悲鳴をあげる蟻さんを尻目に、美那子とフアラとサイモンは、すたこら教室まで逃げ帰った。

さあ、美那子の50メートル競争の番になった。

「あ、蟻さん。出場するつもりだ」

とカバのサイモン。

「しづといわね」

と金髪人形のフアラ。

蟻さんは、失った足の傷口に包帯を巻いていた。

準備運動をしながら栈敷を見ると、美那子のよく知ってる、お馴

染みの顔が何人も、最前列に並んで応援に来ている。

「あははは。蟻の奴、油断したな」

と善行ぜんぎょうが、カンビールを飲みながら言う。

「コンドロイチンが与える影響も、大なりと見るべきじゃないですか？ しかし義兄さん、蟻の場合は、やっぱりギ酸ですかね？」

と岸和田啓介きしわた・けいすけ。

「武人は常に死ぬ覚悟が必要なんだ。だから、嫁になれ。美那子」

と吉田勇太郎。よしだ・ゆうたろう

「へえ。美那子ちゃんブルマかあ。美佐子ちゃんも。美和子はブルマ、はかないのか？」

と江守友和。えもり・ともかず

「酒と女と唄を愛さぬ者は一生のまま、馬鹿のままってね。私の言

葉じゃないのよ」

と太田琴美。おおた・ことみ

「ボカッチョっですよね。デカメロンて話を作った男だ」と谷垣利光。たにがき・としみつ

「母さん、女の場合は、酒と男と唄になるんだろっか？」

と広能昌三。ひろの・しょうぞう

「馬鹿だねお前は。美那子さんに笑われるよ」

と広能千鶴。ひろの・ちづる

「美那子ちゃん。念のために、蟻アースジェット買ってきたけど、もおゝ必要ないわよね」

とオカマのナミちゃん。

「みんな、ちょっとうるさいよ！ 美那子ちゃん、これじゃ集中出来ないだろー！」

とロリ山田。

「気にしちゃ駄目よ。勝てる勝負だって、油断しちゃったら、負けちゃうのよ」

と九条ひとみ。

「大丈夫よ。だって美那子ちゃん、まだまだ若いんだもの」  
と福島伸恵。ふくしまのぶえ

「ささ、皆さん。このくらいにしときましようね」  
とジャクのマスターが言った。

「そんな。私たちも応援したい」  
とロマーノの女の子たち。

日本晴れであった。

お母さん。いつも綺麗だったな。

やっぱり一番似てるのは、ワコ姉ねえ(美和子)だな。  
お料理もおいしかったな。

白いハトが一羽、パタパタ飛んで行く。

「こうなったらもう、絶対一等賞よ!」  
と美佐子が叫んだ。

「頑張つて! でも転んじゃ駄目よ!」  
と心配そうな顔をした美和子。

周平はカメラを仕舞って、シングルエイト(8ミリカメラ)を取り出している。

体育教師のトム・クルーズが叫ぶ。  
「位置について！」

ブルマの美那子は真剣な顔で身構える。  
カタツムリさんも、

ウサギさんも、

カエルさんも。

ニョロニョロのへびさんも。

やる気のなさそうな猫さんも。

オモラシをした事のある、隣の席の幸一くんも。

一緒に宿題をやった真里奈ちゃんも。

いつも必ず100点を取っていた、お医者さんの娘で頭のいい麗美ちゃんも。

他のみんなも。

そして、最速の蟻さんも、ギチギチギチと身構える。

「よーい！」

「美那子ちゃんしっかりー！」

と母の美穂子が、身を乗り出して叫んだ。

「どん！」

一気に駆け出した。

美那子は速い。

左足を一本失った蟻さんは、バランスをとれずに、左回りに同じ場所を、ギチギチ言いながら回っている。

美那子は走る。

速い。

速い。

速い。

転ばずに走った美那子は、テープを切った。

「ハイ。一等賞は、太田美那子ちゃん」

美那子は、表彰台に上がって、オレンジウータンの校長先生から賞品をもらった。

「偉いぞ美那子！」

父、周平が、8ミリカメラを回しながら叫んだ。

「凄いわ凄いわ。美那子ちゃんが一等賞よ！」

母、美穂子も、跳び上がって大喜びだ。

ワコ（美和子）姉さんも。

サコ（美佐子）姉さんも。

みんなみんな笑っている。

得意絶頂の美那子は、表彰台の上で、大好きなチャーリーズ・エングエルのファラ・フォーセット・メジャーズを見て覚えた、お得意のポーズを決めた。

美那子は夢をみている（後書き）

そう言えば、最近フアラ・フォーセットを観た。  
ずいぶん久々の再放送なのだが、数々のエンジェル達の中でも一際  
目を引く。  
流石なもんです。

2010年10月

## 禅問答

太田家の面々が集ったのは、一年ぶりであった。

喪中の為、本当にささやかに行われた、美那子の結婚式以来なのだ。

その少し前の周平の葬儀の時、やはり太田家の女達は、一同に会していた。

今、かつての周平同様に、寝たきりとなってしまった美那子を見る時、運命の不思議を想うと同時に、何らかの因縁めいたものを感じてしまう女達であった。

あたかも白雪姫の如き美那子は、かつて、8年間の長きにわたって眠り続け、そして、そのまま永眠した周平の、仏間の隣の、応接間だった部屋で、二階から降ろされた自らのベッドで、眠り続けていた。

仏間はかつて、寝たきりの周平の介護部屋であった。

尼さんになつた琴美ことみが言った。

「善行よしゆきさん、今日も何も食べないのね」

善行よしゆきは呻うめく。

「琴美さん。私は……」

もし神様がいるのなら、おそらくこれは自分に与えられた、最も重い罰なのだろうと思った。

美那子が死んだとしたら、私も死ぬ事が出来る。

美那子が私から去ったとしたら、私は諦める事も、恨む事だって出来る。

しかしこの状態は、あまりにも惨いのではないか？

たとえこのまま自殺したとしても、彼岸に美那子はいないのだから。

それとも、罪深き私への罰を、美那子が代わりに受けたとでも言うのか？

もしそうだとすれば、神様だろうが何だろうが、絶対に間違っている！

そうじゃないか？

可哀相な美那子。

私はいつたい、どうすればいいんだ？

善行の苦悩は、終りが無い。

「琴美さん、私は、どうしたらいいのか、解らないんだ」

あくまでも、琴美は優しい。

「今はただ、休息が必要なのよ。善行さん、ずっと眠ってないんですって？」

美和子も言った。

「そうよ。善行さん。眠らなきゃ駄目よ」

美佐子も言うのだ。

「ここで善行さんが倒れてしまったら……美那子だって……きっと悲しむわ」

善行は久しぶりに外の空気を吸った。

岸和田夫婦を、子の渡市駅（しのわたし）まで送って行ったのだ。

美和子と勇太郎に留守を頼み、琴美も一緒に出た。

帰りに晩飯の買い物をするのだと言う。

久しぶりの喫茶店で、琴美とコーヒーを飲んだ。  
カフェインだかアルカロイドだかに、刺激されたのだろう。  
今やへろへろになった善行は、自分自身でも訳の解らない、思い  
のたけを吐き出した。

「あんな、出家の琴美さん。私はもう狂いそうだよ。

『狂気』。この感覚を、今初めて、逆から辿ってるんだ。

今までの私は、ある種の情熱（変態じみた）から、すぐに、この  
『狂気じみた気持ち』に至ったものなんだ。

だから、なにしろポーンと弾けた結果が『狂気』だと思っていた  
んだよ。

これは、今までは山を、正面から登っていた結果なんだ。

『狂気』ってのは頂上付近に、確かにあるんだ。

ところが、初めて裏から登って見たら、そりゃ険しいもんなんだ。  
悔しい。

もどかしい。

腹立たい。

辛い。

苦しい。

そして、この先に『狂気』があったんだ。

こっちから登っても頂上近辺は、やっぱり『狂気』なんだ。

つまり、……裏筋登りつてのは、実に辛いもんなんだなあ」

琴美が笑って答えた。

「うふふふ。相変わらず、変な感覚の人ね。まあそれが、善行さん  
らしいって事なのよ。

あなたは、裏表があべこべの人なのよ。

普通の人は誰でも、悔しくて、もどかしくて、辛く苦しい人生を  
生きているのよ。

そして、どうにもならなくって『狂気』に至る。

つまり、この『かんなんしんく艱難辛苦山』は、苦しい方が正面。つまり表って事。

きつとあなたは、裏の七合目あたりの住人なんだわ。

だからあなたは、今まで、苦しみに満ちたルートを辿る事が無かったのよ。

幸せな人ね」

「……成る程。確かに私は、脳天気な変態オヤジだったもんな。今でもそうだけど。……」

それじゃ裏のルートってのはさしずめ、七合目が私の住んでる『ムラムラ村』で、八合目が『ド助平満開!』そして九合目が『ポーンと弾ける!』だ。

それから『狂気』に至る。

やっぱり私は、裏筋の住人なんだな」

こんなへんてこな会話は、元々琴美としか出来なかった。

琴美は、顔を赤らめながら、それでも面白そうに言った。

「あなたがお坊さんになったら……きつと、説話が面白いつて評判になるわ」

善行は久々に、絶望ゆえの「こわばり」が解けた思いだ。

ちよつとだけ余裕が出来たお陰で、琴美の話を理解する事ができた。

「琴美さん。すっかり出家になったんだな。琴美さんは、いつも辿っていたのか？ その正面きつての苦しいルートを？」

「ええ。誰でもそうだと思うわ。だからこそ『艱難辛苦山』は、絶

望からの『狂気』を乗り越えてこそ、本物の頂上の、『歓喜』に至るのだと思うの」

「……琴美さんにとっての『歓喜』ってのは、仏教だったって訳かあ」

「善行さん。あなただって、救われるのよ」

「……救いかあ……」

と、善行は、苦渋に満ちた顔をしている。

やはり琴美は、今やお釈迦様の人なのだ。

だが、久々にリラックスした善行は、謙虚に反省する気持ちとはうらはらに、持ち前の批判精神がムラムラと湧き上がってきた。

結局、私の弱さが原因で、琴美は去って行ったに違いない。

私は周平さんと違って、優柔不断だもんな。

やはり琴美は、周平さんのように、意思の強い男に惹かれるんだ。そりゃ仕方が無いよな。

私は、王様やサルタンや天下人に生まれついた訳じゃないし、またそれがいいとも思わないからな。

だけど、とどのつまり、琴美も、私と同じで、快樂主義者のままなんじゃないのか？

琴美は元々、高脳マゾだもんな。

つまり今度は、お釈迦様に支配されなくなっただけじゃないのか？ 出家した事にしたって、歓喜仏にすがり付く他の女信者達よりも、より確実な位置取りをしたかったんじゃないのか？

強い独占欲故に。

しかし、……狂気と歓喜の間を、うろちよると生きてきた私なんかには、何も言う資格はないって事だな。

善行はため息をひとつ。

「救いは欲しい。……しかし、私は罪深いんだ」  
琴美も色々と思いついたらしい。

「そりゃ、あたしだって……」  
と、顔を赤らめる。

「あははは。今、初めて俗世の顔をした。元の琴美さんの表情だ。  
まだまだオンナなんだな。ちよつと安心したよ」

恥ずかしそうに琴美が言った。

「……少しはあなたのお役に立てたって事？」

「うん。お陰でなんだか気が晴れた。流石は尼さんになっただけの  
事はある。このぶんだと、わりかし早く、立ち直れそうだよ」

と言った善行であったが、真つ赤な嘘をついている自分に気付いて  
いた。

医者やカウンセラーを騙そうとする、患者の心持ちと同じであつ  
た。

救い。私のそれは……やっぱり……死にたいのかもしれない。

と考えていたのだ。

人生に背を向けたままの、この快樂主義者は、今やこのまま、精  
神が浮遊した状態のまま、「死にたい」と願っていた。

## 善行の死

次の日の早朝、善行は旅に出た。よじゆき

行き先は、八甲田山の麓なら何処でも良かった。

母方の祖父が、八甲田山の雪中行軍に参加した話を、子供の頃、聞かされていたからだ。

雪中で死にたいと具体的に思った訳ではない。

とりあえず、八甲田の雪山が見たいと思ったのだ。

植物人間となった美那子を見ている事は辛く、いつそ美那子が死んでしまったなら、すぐに自分も死んで、一緒に埋められたいと、ひたすら願った。

(三界に身の置き所なんか、もはや無い)

と思った。

ひなびた旅館など見つかりそうもないので、駅前の電話ボックスのタウンページで、ペンションを見つけて逗留を始めた。

警戒されるのが嫌で、努めて明るく振舞った。

「隣り村が、経済特区のドブロク特区なんです。お客さん、意味、解りますかあ？ とにかく、旨いって評判なんですよ」とペンションの若旦那が、ドブロクを勧めてくれた。

(末期のドブロクもいいかもしれない)

善行は、雪山を眺めて日がなドロクを飲む。

美那子の面倒は、琴美と美和子が見ている。

琴美はこのまま、太田ビルへ帰ってきた事になる。

周平同様に、美那子の看病こそが、自分へ課せられた使命だと感じただけだ。

美和子と吉田勇太郎も、太田ビル二階の、善行が暮らしていた部屋にいる。

元々美和子のものだった部屋なのだ。

勇太郎の東京での活動が増えた為と、やはり姉として、美那子の面倒を見たいが為だ。

美佐子も頻りにやって来て、泊まっていく。

太田家の女達は、眠り姫となった美那子を守って、寄り添って暮らし始めた。

その夜は吹雪であった。

三日間ばかり逗留を続けていた善行であったが、べろべろに酔っぱらった勢いで、ペンションからふらふらと外へ出た。

雪の中を、さ迷っているうちに、小便をもよおした。じよろじよろと放出した。

「おーおー凄く凄く。ぼやぼやと湯気が立つよ。アハハハハハ」

携帯の明かりで、雪の上の小便を見た。

「パインジュースみたいだ。綺麗なもんだな」  
ペンションの明かりや人家の明かりが、まったく見えなくなった事に、すでに気付いていたのだが、恐ろしいとも何とも思わなかった。

寒ささえ感じない。

やたら大声を出してみたくなった。

叫ぶ言葉は一つしかない。

「美那子ー！」

何べんも叫んでみた。

「美那子ー！ 美那子ー！ 美那子ー！ 美那子ー！」

ふいふいふいふい。ふいふいふいふい。ふいふいふい  
つふいふい

断続的な吹雪の音は、強弱の抑揚をつけながら、善行の声をすぐさま吸い込んでしまう。

このまま、死ぬのだと思った。

悔いは無いと思った訳じゃない。

考え始めたら、悔いだらけに決まっている。

誰だつてそうじゃないか？ と思う。

だから、「これで良い」と思ったのだ。

悲しいとか、苦しいとか、後悔も未練も、何も感じない。

吹雪の音だけが聞こえる。

善行は、この吹雪の夜を待っていたのだ。

実際、雪が降らずに、ぴゅーぴゅーと風だけが吹いた夜は、骨まで吹き抜ける寒さに、身が縮んでしまつて、外出する事が出来なかつた。

結局部屋で、運んで来てもらった電気こたつにもぐつて、ドブロクを飲んで寝た。

次の日は風の無い夜で、しんしんと雪が降つた。

この夜は感傷的になりすぎて、やっぱりドブロクを相手に泣いた。

「泣いちゃいかん。泣いたら風邪を引く。だから泣いちゃいかん」と言いつつ眠つてしまつた。

風邪を引いたら、吹雪の中に出て行く気が、失せてしまつに決まっている。

今夜の吹雪の、この水気たっぷり風の風は、北三陸育ちの善行にとつては、ずいぶん久々に味わうのだが、予想通りのものだった。生体である自分を、最もたやすく終らしてくれるに違いない。始めから、そんな気がしていたのだ。

優しく柔らかなこの雪は、このまますぐに自分を埋めてくれるだろう。

だから、安心して、雪の中に倒れた。

なんだか可笑しかった。

雪を舐めてみて、雪の味がしたから、声を出して笑つた。

どうやら、上手くやったようだ。

ふいふいふいと聞こえる音の中に、

「善行さん」

と美那子の声が交じる。

「んなわきやないだろ？ 先に逝くよ……美那子……私は……」

善行の顔は、すぐに、夜目にも真っ白な雪に覆い隠された。



## 脳の惑星

サイボーグとなった善行は、ロボット体に馴染んできた。  
脳の「入れ物」であるこの身体は、考えようによっては、快適だとも言えるのだった。

ここ半年あまり、鈍痛が当たり前になってしまった五十肩も、シクシクとすぐ痛み出す奥歯の虫歯も、秘かに糖尿か？ と案じていた慢性的な足の、ダルさを通り越した痛みも、きれいさっぱりと無くなったのだ。

ジェームズの言う通り、まさに生まれ変わった心地なのだ。

この施設のロビーは広く、ドーム形の高い天井の下には、ステンドグラスがはめ込まれた細長い窓があり、そこから差し込む五色の光が、何やら霊験あらたかな感じを醸し出している。

そうだ。

まるで此処は、人類の静かなる終焉を弔う、教会のようではないか。

このロビーの中ほどで、サイボーグ善行は、身体のうちこちを動かしている。

スライド式に360度回転する、ずんぐりした胴体が面白くてたまらない様子だ。

くるくると回転して遊んでいる。

この胴体に乗っかっているドーム型の頭と、それから丸い目玉に四角い口は、幼児向きマンガのように、シンプルで可愛いらしい。

それを見守るジェームズも、全く同じ身体である。

ずん胴の胴体から伸ばしたジャバラの腕が、ぶらぶらと揺れている。

サイボーグ善行は、大きな自動ドアを開けて、ロビーから中庭へ出た。

「おお！ 足の裏には滑車が付いている。面白い面白い。まるでローラスケートだ」

ギッチギッチと歩く事も出来るのだが、シャツと滑って行く。本当に久々に浴びる、お天道様なのだ。

枯れて久しい噴水池は、大きな物で、四角い堀割の中ほどに、背丈ほどの高さの台座に乗った小便小僧が、据えられている。

干上がった池の底は、腐葉土に覆われて、今や灌木まで生い茂っている。

そこから、池の脇を通る舗道の並木に向かって、ぐねぐねと蔦が伸びる。

舗道の脇には、苔むしたブロンズ像が立ち並んでいるのだが、並木に絡み付いた蔦が、寄生木となって立ち上がり、絡み付き、像の表情を不気味なものにしていた。

なんとも気持ちが悪い。

これらの像は、ギリシャ風のものから徐々に、ゲートに近づくに従って、現代風なものに変わってゆく。

善行に判るものもあつた。

いっぱいあるなあ。

アレキサンダーの前の奴は誰だろう？

ナポレオンやワシントンは判るぞ。

流石にヒットラーは無いな。

二宮金次郎が欲しいな。

あと、『考える人』もね。  
おっ、こいつ知ってるよ。  
アタチエルク。

ムスタファ・ケマル・パシャだ。  
ねこおばちゃんと旅行で行った、アンカラの駅で見た写真と同じ  
ポーズだ。

斜めイヤラシ目線がグーだな。  
『トルコの父』ってんだよなあ。

ああ、トルコかあ。  
昭和は遠くなりにけりつて、あ！ そうか。  
平成だって、遙かに遠い昔なんだよなあ。

人類文明の終焉を思い出させる。  
当然、誰もいない。  
後ろからついてくるジェームズが、自動ドアの点検をしている。

ゲートのすぐ傍の、つまりゲートから見が一番前の銅像が、何と  
なく善行に似ていた。

五百羅漢ごひゃくらかんと同じだなあ。必ず自分に似てるのがあるんだよ。

台座にはこう書かれていた。

『クローンの父。小野寺善行博士』

クローンの実用化に成功。

ノーベル科学賞受賞。

ハウ・メニ・モア・タイムズ賞受賞。

勲一等瑞宝章受賞。

フンダリー・ケツタリ賞受賞。

人類のクローン科学に多大なる貢献を成す。

クローン研究所の創設者であり、『クローンの父』と呼ばれる。  
195x~205x

へえ？ コイツ、同姓同名じゃないか？

しかも、同じ年に生まれてらあ。

おっ！ 惜しいね！ 百歳まで、もう一歩だったね。

小春日和の陽気なのだが、ロボット体には皮膚感覚というものがないので、気持ち良さを体感する事はできない。

視界は、パソコンのモニターのようになっていて、風速何メートルとか、照度何ルクスとか、湿度何パーセントとか、視界である画面の右下に、一々表示されるのが、うっとおしい。

「アア、モウ、イヤンナツチャウナ」

声だって、合成音をスピーカーで発しているので、気を抜くと、無機質で非人間的なものになる。

「マルデ、SFミタイジヤナイカ！ クソ！」

また、カタカナになってしまった。

「まるでボタンとかロボコンって感じだな。そうそう、手塚治虫のロビタみたいでもあるな。まあ、良く言ったところで、ドラエモンだな。……ふう。どうにか人間らしく喋れた」

しかし、元々メタボリック体形の善行は、元の体形とそんなに違わない感じもする。

「ハハハハ」

とジエームズが笑い声を発する。

「何が可笑しいんだ？」

と善行が尋ねる。

「この身体のデザインといい、情景描写といい、作者のビジュアルセンスの無さを笑ったのです」

とジェームズ。

「ああ。そもそも文章がまるつきり下手くそだし、そのうえ情景描写なんて、超弩級に駄目な奴なんだ」

と善行。

何ですと！

ところで善行、情景描写って何だ？

「コイツ、やっぱり馬鹿だぜ」

と善行。

くっそー。調べてやる。

ちくしょう。辞書電卓にのってないよ。

あ、あつた。なんじゃこりゃ？

『複』情景描写の

scenic「通例限定」《絵などが》芝居を見るような。

おい善行、これでお前、解るのか？

「聞こえないふりをしましょう」

とジェームズ。

おい、ジェームズ。我こそは『在って在る者』

「馬鹿相手にしちや駄目だぞ」

と善行。

二人はゲートを開いて施設の外へ出た。

あのね。

遠くにね。

山のシルエットが見えるんだよ。

まるで「青い山脈」って感じだけど、遠くだから青いのか灰色なのかよく判らないよ。

目の前はズーッと野原だよ。

当然、後ろは巨大施設だよ。

足の下は地面だよ。

空を照らしているのは太陽だよ。

だから、今は昼だよ。

「開き直ったみたいですね」

とジエームズ。

「こいつあ、すぐに、開き直りやがんだ！」  
と善行。

二人は、巨大施設から山の方角を目指して遠ざかる。

荒れ野が続いている。

砂漠ではない。

荒れ野が続いている。

砂漠ではない。

荒れ野が続いている。

砂漠ではない。

……

えーと……、荒れ野が続いている。

「おいロツカ、壊れたのか？」  
と、善行。

ひぐん善行。助けてくれ。

稲刈りの後の、秋口の田んぼの情景しか思い浮かばん。  
あつ、赤とんぼが飛んだ。

「アハハハハ」  
とジエームズが、カタカナで笑った。

ところでジエームズは、この施設の保守管理に就いて、かれこれ  
20年経つのだと言う。

ジエームズの先代は、ジエームズの脳を、ロボット体に装着して  
覚醒させると、一ヶ月程一緒に活動した後で、例の、脳の保存装着  
に入って、冷凍睡眠モードで眠ってしまったとの事だ。

「ワタシモ、ハヤク、ヤスミタイノデス」  
と、カタカナに戻ったジエームズが言った。

「しかしジエームズさん、眠るったって、次に覚醒する保障は、皆  
無に等しい訳だ。アンタ、自殺するのと一緒にだよ！」  
と、善行。

「ツカレマシタ。ハハハハハ」

と、ジェームズは虚ろに笑う。

ずいぶん遠くまで歩いた。

当然、サイボーグ善行は、疲れを感じない。

ムチャヒンジャ時代の廃墟があった。

博物館があつたので入ってみた。

思わず善行は泣いてしまった。

展示品の中に、お地蔵さんや、お稲荷さんがあつたのだ。

道中は狸や狐、それにウサギや、数々の野鳥。

野生化した犬や猫を見た。

人間文明の滅亡とは、地球にとっては、悲劇でも何でもない事なのだろう。

ところで、ロボット体とは便利な物で、暑さ寒さを感じない。

どこで寝ようが変わりは無い。

だから結局、数日間、さ迷って施設に帰った。

善行は『ドリームマシン』を試してみたのだが、形を留めている物は発見できなかった。

月日の流れは金属をも腐らせる。

半月後の事である。

必死に引き止める善行を尻目に、ジェームズは、その脳を外して、冷凍睡眠ボックスに保存してしまった。

そして、ロボット体は、自動モードで壁際の所定の場所に戻ると、ラムセスの石像のような恰好で、動きを止めた。

今や、クローン財団に眠る、千個の脳だけが最後の人類であつた。

人類の立場から見た場合、地球は『脳の惑星』となったのだ。  
善行は、眠れる『脳の惑星』で、一人ぼっちになってしまった。

未完。

ストーリーは出来てるのですが。つらいから書けないです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9601f/>

---

超電導美那子Z 脳の惑星

2010年10月9日02時57分発行